

---

# メテオールを超える力

仮面ライダーズラッシュ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メテオールを超える力

### 【Nコード】

N7007X

### 【作者名】

仮面ライダースラッシュ

### 【あらすじ】

遊戯王をウルトラマンの世界にぶち込んでみた話。  
過度な期待はしないでください。

## 始まりの拳

タスケ ジンカSIDE

突然だが今日、俺が転生して18年が過ぎた。

前の世界で死んでから神に出会い転生先の世界はランダムに決め、遊戯王のカードを実体化させ事ができるデュエルディスクをもらった。

そしてこの世界に来て2歳の頃、この世界のお爺ちゃんの話で俺のいる世界が分かった。

お爺ちゃんは昔、ウルトラマンに助けてもらっていたと俺によく話してくれた。

そして、今この世界にはG U Y Sが有る。

つまり、此処はウルトラマンメビウスの世界らしい。

4ヶ月前の新聞でイカルガジョージがサッカーをやっている所からまだ原作前らしい。

勿論G U Y Sに入るつもりだ。

明々後日には俺もG U Y Sクルーの仲間入りらしい。

そして今日、避難警報が発令されディノゾールが町に来了。  
( 召喚したモンスターは俺から離れすぎると消えるため、宇宙で撃退は不可能だった。 )

しかし、俺というイレギュラーのせいかディノゾールは2体来た。

暫くしてメビウスが来たが2体相手に苦戦しているらしい。

1体を隙を見て倒したが、まだ1体残ってる。

仕方がないか……

「装備魔法発動！光学迷彩アーマーをDホイールと俺に装備！」

神様が気を利かせてくれてDホイールまでくれてよかったぜ。

「攻撃表示でジャンクシンクロンを召喚！！」

機械の様な黄色の服を着た戦士が現れる。

なお、モンスターは攻撃力が1900以下だと人間サイズ、攻撃力2000以上だとウルトラマンの半分、攻撃力4000以上でウルトラマンと同じだ。

Dホイールで走りながら、モンスターを召喚して行く。

「ボルトヘッジホッグを召喚！！」

ネジが背中についたネズミが出てくる。

「レベル2！ボルトヘッジホッグに、レベル3！ジャンクシンクロンをチューニング！」

三つの輪がボルトヘッジホッグを囲む。

「シンクロ召喚！現れる！ジャンクウォリアー！！」

光差す道から、ガラクタの戦士ジャンクウォリアーが現れる。

「ジャンクウォリアー！ディノゾールに攻撃！スクラップフィスト  
！！」

『でああ！はああああ！！だあ！！』

空中に上昇して、急降下してエネルギー状の拳をぶつける。

その威力にディノゾールが爆発する。

俺はDホイールを止める。

「さあ、これからが始まりだ！！」

さてと、これからどう生きていきますか。

## G U Y S の仲間

タスケ ジンカSIDE

ディノゾールを倒した翌日の新聞は怪獣とウルトラマンの再来がデカデカと載っていた。

ジャンクウォリアーについては載ってなかったけどな！（TOT）

まあ、そんな事より俺もついにG U Y Sクルーに入れました。

今はトリヤマさんが東京湾から電波が発見されたとかで文句を言っている。

「それで、クルーの補充の方はどうなっている？ちゃんと進んでいるのかね！？こっちはディノゾールの死体の処理で忙しいんだ。ああ、忙しい！忙しい！」

最初から最後まで文句を言って出て行った。

暫くしてサコミズ隊長が口を開いた。

「それじゃあ、自己紹介をしてくれないかい？ジンカ君？」

「あ、はい！タスケ ジンカです！1週間前にG U Y S への入隊を希望し、此処に配属されました！これからよろしくお願いします！」

「ジンカが……俺は、アイハラ・リュウ。たぶん、サコミズさんの代わりに前線で指揮を取ることになるからまあよろしくな。」

「はい！よろしく願いますアイハラさん！」

「リュウでいいぞ。」

「僕はヒビノミライ！これから宜しく！」

「では、自己紹介も済んだ所でミーティングを始めるぞ。」

「で、サコミズさん？何を会議するんですか？」

「朝9時からのGUY'Sの行動さ。ジンカ君は基地に残り異常事態に備えてくれ。」

「はい！」

「ミライとリュウは一般人のスカウトに回ってくれ。」

「了解！」「」

くく朝10時半くく

二人は帰ってきたが、

「僕はそうは思いません！彼らはGUY'Sのクルーに相応しい人たちです！――」

「……好きにしゃがれ！俺は俺で勝手にやる！」

帰ってきて早々喧嘩はやめてくださいよ……はあああ……

「ちよつと、行ってくる。」

「はい、サコミズ隊長。」

サコミズ隊長が出て行った後、ミライさんも出て行った。

「やっと一人になれるな。」

俺はUSBメモリを取り出した。

「これで誰にも見られないな。」

俺は、キーボードを打ち始めた。

~~~~~11時~~~~~

ミライさんが連れて来た4人（テツペイ、マリア、コノミ、ジョージ）とリュウさん、そして俺はガンフェニックスの塗装作業をした。

休憩中にカレーを食べ、リュウさんが昔の防衛チームのマシンを説明したりして、再び塗装。

あっという間に仕上がり、皆の絆も深まった気がした。

塗装が終了して直ぐに俺は、メインルームでガンフェニックスの状

態を確認していると、警報がなった。

地底からグドンが現れた！

全員が集まり、モニターのグドンを見てミライさんが4人を説得。多少のイザコザがあったが4人も急遽クールとして戦うことになった。

そんな中俺はと言うと、

「何で、カメラマンなの〜!?!」

「すまないね。そのカメラは怪獣のありとあらゆるデータを取れる完全観察型のカメラなんだ。

グドンから1KM以内でいいからなるべくデータを取ってくれ。」

と、サコミズ隊長からの命令の為、車で移動中です。

それで、リュウさん達は4人の入隊と共にメテオールを使用。しかし、マリアさんが途中で限界に達しリュウさんの方も時間切れで鞭を喰らいそうになる。

「トランプ発動！ヒーローバリア！」

ここで予備知識だが、攻撃反応型のトランプは攻撃の仕方違うトランプを発動しなければならない。

今回の場合、ビーム攻撃ではないのでドレインシールド、マジックシンダー等の反射や吸収は使えず、また、次元幽閉や攻撃の無力化は主に突進や飛び掛り等に使用できる。

体の一部を使ったり、ビームやミサイル等の爆発系を防げる万能なのはヒーローバリアである。

そして、グドンはそのまま次の攻撃をして、ヒーローバリアを破壊する。

鞭がマシンに当たる少し前にメビウスが登場。

庇いながらも何とか何も無い土地に場所を移動した。って、追いか  
けなきゃ！

その後、格闘戦して弱って隙を見せたグドンに、メビウムブレード  
が炸裂！

グドンの鞭を切り落とし倒した。

## 初の接触（前書き）

この小説の主人公の能力の設定

- ・ 正規の召喚手順をしなくてはならない。つまり、簡単に強いモンスターは現れない。
- ・ 攻撃表示だと一度でも攻撃を受けると消える。
- ・ 守備表示だと、防御力以上の攻撃を受けると攻撃を相殺してから消える。
- ・ モンスターの制限時間は1分。マケット怪獣と同じ。
- ・ モンスターは怪獣の体力以上の攻撃力が有れば倒せる。つまり、ウルトラマンが弱らせたからこそ止めをさせれる。（TVでよく出てきたサドラの体力が3800位）
- ・ 主人公が使っているのは遊星か十代のデッキです。
- ・ フィールド魔法は使えない。

以上がこの主人公の能力の設定です。もしかしたら、もっと制限されたりするかもしれませんが………  
とりあえず、これで納得してくれたら良いんですが………

## 初の接触

タスケ ジンカSIDE

只今、GUY Sで会議中です。

俺が出したヒーローバリアについて話し合っている様です。

「このバリアはリュウさん達の前に現れてグドンの攻撃から守ってくれたんですね？」

「ああ、本当に守ったかは怪しいが……」

「でも、このバリアがなかったら墜落してたんですね？リュウさんもジョージさんも怪我しなくてよかったですね！」

「……それで、テツペイ。このバリアについて何か分かったかい？」

「はい！実はこれを調べてる時にディノゾールの戦闘記録を観たらこのバリアと同じエネルギーで構成されたロボットの様な戦士が2体目のディノゾールを倒していました。本部は内部の人間以外には見せないようですけど。」

「まあ、GUY Sは組織だからな。得体の知れない奴に守るべき地球を守られたんだ。正体が分かるまで隠すだろう。」

「それで、結局この二つは何なの？」

「ロボの様な戦士からは生体反応も確認されました。どうやら、エネルギーで形作られた命のようです。バリアの方は生体反応は確認されませんでした。」

エネルギーはどうやら過去に存在していたマイナスエネルギーの様な感情のエネルギーの様です。」

おお、正解だ！この実体化はカードの内側の思いで出来ているんだ。

「しかし、どんな感情なのかは分かりません。少なくとも悪い感情ではないようですけど……」

「何だよ。はつきり出来ねえのか？」

「すみません。まだ分からないですよ。」

「まあ、敵に回ってきたら遠慮なく撃つけどな。」

「……じゃあ、会議は終了だ。休憩に入ってくれ。テッペイ、お疲れ様。」

〳〳橋の下 休憩時間〳〳

さてと、カードと話でもするかな？

「あージンカ君！」

あれ、ミライさんが何でこんな所に……まさか！

「ちょっと、先の会議に出てきたエネルギー体について話したいん

ですが。」

ばれたな。顔つきが真剣だな。まあ、ウルトラマンならばいてもいいか。人間にばれたらこれを解析されちまう。

「話ってなんですか、ミライさん？」

「君があのエネルギー体を操っているんですか!？」

「やっぱりか。ばれない様にしたのにな。」

「君は、この星で何をしている!?!どこの星の者だ!」

ミライさんは素早く銃を俺に向ける。

「僕は地球人だよ。ただ特殊な能力を持っているだけだよ。」

「特殊な能力？」

「っと、話をする前に君の実力を見せてくれよ!ウルトラマンメビウス!」

「!?!」

ミライさんが驚いている間に、俺はカードを引いた。

「俺はスピードウォリアーを召喚して俺に装備!」

下級モンスターは装備できるが、レベル5以上は無理。

「メビウスウウウ！」

変身したか。

「喰らえ！ソニックエッジ！！」

回転蹴りをミライに、否、人間サイズのメビウスに放つ！

しかし、側転で避けられる。

「トラップ発動！仕込みマシンガン！」

マシンガンが下から出てきてメビウスに向かう。

しかし、メビウスは素早くバリアを張り防ぐ。

「どうして、こんな事をするんだ！君は地球人じゃないのか！？」

「これはテストだ！俺のことをお前に話すか話さないかのな！」

「くー！」

素早く近づいて蹴りを入れる。

スピードウォリアーの実体化状態の効果はスピードが常に上昇と、蹴りの速度の上昇だ。

直線の速さなら、チーターより少し劣る程度だ。

ウルトラ戦士といえどこれは本気を出さないと負けるぞ？

「はあ！」

メビウスの攻撃を避ける。

ちなみに、フィールドバリアを張っている為、この戦闘のエネルギー反応どころか音や俺達の姿すら見えないようになっている。

OCGのフィールドバリアの能力とかけ離れすぎだろ。

「さつさと光線を使ったらどうだ！」

「くー！」

ブレスレットから、光弾を撃って来たか。

甘いけどな！

「当たらなければどうと言っ事はない！」

避ける！

しかし、

「な！？」

メビウスがエネルギーを腕にためて突っ込んできた。

俺が驚いた隙にメビウスの拳が俺を正確に突いて来る！

が、スピードウォリアーが装備を強制解除し俺の代わりに攻撃を受ける。

「サンキュー。スピードウォリアー。」

そして俺は両手を挙げて、

「参った、降参だ。俺のことについて話してやるよ。」

メビウスは変身を解く。

「じゃあ、話してくれないか。能力の事と僕の正体を知っていた理由を。」

〜〜説明中〜〜

「じゃあ、君はその能力でカードを実体化させていた。そして、能力の暴走で未来を見た。」

「ああ。」

転生うんぬんは教えなかった。

「でも、遊戯王か。そういえば持って来てたっけ。ウルトラ製のカード。」

「え！？有るの！？光の星に！？」

「うん。宇宙でも大流行で星によって違うカードも作ってるし。最

近じゃあ、バルタン星人も作ってるらしいし。なんでも、これを研究して地球の文化を知ろう！とかなんとかで。」

ええええ！！！マジかよ！

「今度、デュエルしない？」

「うん！いいよ！」

こうして、メビウス（≡ミライ）と仲良くなったのだ。

因みに、この世界の地球の遊戯王は防衛チームと怪獣がモデルにされているのだった。

## 初の接触（後書き）

今回はメビウス戦でした。

今、親にパソコン禁止にされていますので更新できるのは休日や金曜日ですね。

あと、感想を読みましたが悪印象でしたね。

でも、これからなるべく良くなる為に頑張りますので読みたい人だけ読み続けてください。

この小説はメビウスのストーリーの回と決闘デュエルの回の両方を書いていきます。

オリカがですが、亀7さんとなるべく違うステータスにします。というか、亀7さんの方が強過ぎるから、なるべくOCGに出ても問題ない位のカードにします。

亀7さん、不快に思われたらすいません。

## 二人の共闘

タスケ ジンカSIDE

みんなの顔が暗いな…

恐らく3話のバードン出現の前なんだろう。

そんなことを思いながら、ミライと遊戯王をする。

「はい、ジャンクウォリアーでダイレクトアタック。」

これで、5連勝

「あゝあ、やっぱり強いですね。ジンカ君。」

すると、テッペイさんがメビウスのカラータイマーのドアップの動  
画を出す。

「ちょっと二人共、このカラータイマー気になりませんか？何でこ  
んな物があるんだろう？」

「そりゃあ、あんだだけ攻撃喰らえば危険信号が鳴るだろ。まあ、も  
しかしたら一定時間で鳴るかもしれないけどな。」

「うーん、それが正しいのかな？」

暫くすると、警報が鳴り始めた。

「火山に大型の謎の影をGUYSSスペーシーが発見！至急調査に向かってください。」

「GUYSSサリーゴー！」

「『『『『『『G・I・G！』『』『』『』『』」

『『夜中 噴火中の火山』』

俺は、今回は車ではなく偵察用の速度と操作性重視の飛行機一人で乗っている。

「火山地帯が危険なのは分かりますが、何でこの前は車だったんですか？」

「怪獣の視線は高い位置にいる。飛行機のほうが発見され易いが、車なら怪獣は同じ物が有るから気にも留めないだろうからね。」

「あ、そう言う事〜！」

他の皆は地上に降りて、俺は空中から探すことになった。

暫くすると、ミライとマリアさんの方にゆれが発生した。

そして、火山怪鳥バードンが現れた。

俺は無線を切った。

「つち、しょうがない！融合発動！ネオスと戦士族のエッジマンを融合！こい！E・HEROネオス・ナイト！！」

ネオス・ナイト攻撃力2500 3800

「いけ！ラス・オブ・ネオス・スラッシュュ！！」

『であああ！！』

しかし、バードンの体力はどうかやらネオスの攻撃力を上回っているようだ。

モンスターは怪獣の体力以上の攻撃力で攻撃して一撃で倒す必殺型。

しかし、体力が攻撃力以上だと体力を500減らす攻撃にしかない。

「まあ、計算道理だ。まずは、体力を減らすか。魔法発動！ファイアーボール！」

しかし、バードンに火は効果が薄くネオスが攻撃を受ける。

そして、霧と成って消えていく。

「くそ！このデッキの中で廻りに被害を与えない攻撃ができる貴重な一体が！」

ネオス・ナイトは剣で攻撃するので、回りに被害を与えない上に、融合素材で攻撃力が上がる。

実体化での戦闘では一番いいモンスターだ。

それを早々に失うとは、俺はやはりこういう戦闘の経験が無いな……

「ん？」

考えを巡らしていると、ウルトラマンメビウスが光と共に現れた。

「とりあえず、援護に回ろう。」

すると、バードンが翼を使って風を起こして来た。

「なら、これだ！融合発動！来い！マッドボールマン！」

丸い土のようなマッドボールマンが現れ、メビウスとバードンの間に立つ。

「装備魔法！巨大化発動！」

マッドボールマンの大きさが、2倍となり強風からメビウスを守る。

「今だ！」

メビウスは俺のほうを見てうなずくと、バードンに走っていった。

しかし、バードンが火を吐いてメビウスを攻撃。

何とかよけるが、空中でバードンの毒を受ける。

何とか気合で動くこととするが、毒が効き始めていて動くことすらま

まならない。

「やばい！とりあえず、トラップ発動！ヒーローバリア！」

バードンの攻撃からメビウスを守る。

そして、ガンウィンガーの攻撃を受けたバードンはメビウスの光弾を避けて空へ飛んでいった。

追おうとしたが、ミライが毒を受けているので全員はフェニックスネストへ帰還した。

〜〜フェニックスネスト〜〜

G U Y Sオーシャンにバードンを任せて、俺達G U Y Sジャパンは仮眠をとった。

〜〜朝〜〜

テッペイさんが徹夜してウルトラマンについて調べていた事を話した。

ミライと隊長が来て話し終わるとバードンが日本に接近していた。

俺はもうデータをとる必要が無い為、先にバードンの着陸予測地点にスタンバイしている。

暫くすると、ガンウィンガーとガンローダーのマニューバモードが

切れてバードンは日本に着陸した。

俺は、銃を撃ってバードンの毒袋を狙って撃ったが、当たらない！  
風のせいで視界が悪い。

そして、カラータイマーが鳴っている状態のメビウスが現れた。  
攻撃して、避けて、反撃してを繰り返すと、バードンが飛びながら  
突っ込んで来た。

一回目は避けるが、二回目当たりそうになった時、キャプチャー  
キューブで守られた。

その後、リュウの湯とGUY'Sのサポートでバードンを無事にメビ  
ウムシュート撃って倒した。

そして、フェニックスネストでは新しく現れたウルトラマンの名称  
がウルトラマンメビウスと決まった。

## 二人の共闘（後書き）

次回はミライ対ジンカのデュエルです。  
お楽しみに。

## ウルトラマンのデュエル(前書き)

この小説でのルールは初期ライフは4000で、マスタールールが適用されています。

カードの説明は使われたオリカだけ書きます。ご了承ください。

## ウルトラマンのデュエル

〳〵バードンとの戦闘前〳〵

タスケ ジンカSIDE

と言う事で、休日にミライを俺のアパートまで連れてデュエルをする事にしました。

光の国のカードだってばれたら大変だから俺の所でやる事になった。

「では、はじめましょう！」

「デュエル！！！！」

デッキ名：命掛けの守護VS不動遊星つばいデッキ（ジンカ）

先攻はミライ。

「僕から行きます！ドロー！」

僕は手札から【ウルトラマンドロー】を召喚！」

ウルトラマンドロー 光属性 3 戦士族 ATK300 DE  
F2000

やはり知らないカードだな。

「このモンスターを攻撃表示で召喚された時カードを一枚ドロースます！」

更に、ドロールしたカードが光属性ならこのモンスターを守備表示に変更します！

僕が引いたのは【ウルトラ兄弟 ジャック】！光属性なので守備表示に変更します！

カードを2枚伏せて、エンドフェイズ時にドローが守備表示のため僕のLPに100のダメージを受けます！

ターンエンドです！」

ミライ LP4000 3900

まあまあな効果だな。

「俺のターン！ドロー！手札から【死者への手向け】を発動！手札一枚を捨てて相手モンスターを破壊する！俺はドローを破壊する！」

「伏せカードを使います！【ウルトラの母の奇跡】！」

このカードはウルトラと名のついたモンスターがメインフェイズ時に相手のカードの効果で送られたターンのメインフェイズ2で墓地から特殊召喚します！」

ウルトラの母の奇跡 通常罫 効果：ウルトラと名のついたモンスターがメインフェイズ時にカードの効果でフィールドから墓地に送られた時に発動できる。墓地から破壊されたモンスターをメインフェイズ2に特殊召喚する。

「更に、ジャンク・シンクロンを攻撃表示で召喚！ジャンク・シンクロンの効果で墓地のスピードウォリアーを守備表示で特殊召喚！」

行くぞ、ミライ！レベル2、スピードウォリアーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！シンクロ召喚！来い、ジャンクウォリアー！それじゃあバトル！  
ジャンクウォリアーでダイレクトアタック！」

「トラップを使います！【緊急出動】！手札からウルトラと名がつくモンスターをライフを半分払って特殊召喚する！こい、ウルトラ兄弟 ジャック！」

ウルトラ兄弟 ジャック 光属性 6 ATK2400 DEF1600

ミライ LP3900 1950

「っち！攻撃中止だ！」

「メインフェイズ2にドロー口を復活させます！」

「1枚伏せてターンエンド！」

ミライ LP1950 1850

「僕の番です！ドロー！ドロー口をリリースして、【ウルトラマンテイガLv6】を召喚！」

テイガキターーーーー！！！！

ウルトラマンテイガ 光属性 6 戦士族 ATK2400 DEF1500 D

「ティガは僕のLPが初期のLPの半分以下の場合、デッキに戻すことでウルトラマンティガと名のつくモンスターをデッキから召喚できます！僕は攻撃表示で【ウルトラマンティガ パワー】を召喚します！」

ウルトラマンティガ パワー 光属性 7 戦士族 ATK27  
00 DEF2000

「行きます！ティガでジャンクウォリアーに攻撃！」

「トラップ発動！パワーの効果でトラップは僕のバトルフェイズには使えません！」つく！」

ジンカ LP4000 3600

「続けて、ジャックで攻撃！」

ジンカ LP3600 1200

「やるな！」

「僕はこれでターンエンド！」

さてと、これで逆転できるかな・・・？

「俺の…ターーン！……よし！手札を捨て、クイック・シンクロンを特殊召喚！更にクイック・シンクロンのレベルを1つ下げて、レベルスティーラを特殊召喚！そして、ジャンク・シンクロンを召喚！効果でスピードウォリアーを特殊召喚！」

「モンスターが4体も!？」

「レベル1のステイラとレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング!

こい!アームズエイド!

更にレベル2のスピードウォリアーとレベル4のクイック・シンクロンをチューニング!

現れる!ブリーナク!

そして、アームズエイドを装備してバトル!

ブリーナク ATK 2300 3300

「ジャックに攻撃だ!凍えろ!アイスエッジ!」

ミライ LP 1850 950

「まだまだ!アームズエイドの効果!破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える!」

ミライ LP 950 0

「あゝあ、僕の負けですか。」

「今回は勝たせてもらったぜ!ミライ!」

「ねえ、もう一度やりましょー!」

「おう!また勝ってやる!」

こうして、俺の休日は過ぎて行った。

## ウルトラマンのデュエル（後書き）

初めてのデュエルシーンなので何か間違えが有れば遠慮なく言ってください。

### 3体の守護者

ジンカSIDE

今回は基地の外でマケット怪獣のテストです。

「そして！私の提案でマケット怪獣、第一号に選ばれたのは「うしやあ！実験第一号は俺だ！」

そして、カプセルを持って指定エリアまで降りていったリュウさんはミクラスを呼び出した。

「なんか、弱そ〜…」

「しかも、不細工だな。」

「「かわいい…」「」

上からマリアさん、ジョージさん、コトミさんと俺。

ミクラスは辛辣な言葉を貰いました。でも、よく観ると可愛いんだよな、これ。

そして、ミクラスはコトミさんを見て目を潤した。

なんなんだ、この怪獣…

ん？なぜ俺を見てる？そして、うれしそうにしてるし……お父さん  
とでも思われたのか？

「ミクラスには明らかに人類に味方をしていた形跡が有る。  
しかし、敵を倒した記録は一つもありません。」

「でも、なんでミクラスを選んだんですか？味方をしていた形跡が  
あるのはウインダムやアギラもそうじゃないですか？」

「ウインダムは遠距離攻撃の威力がまだ再現できず、アギラとミク  
ラスは多数決でミクラスに決めたのだ。」

おお、そう言う事情が有ったのか。

「しかし、ウインダムはもう少しで完成まで来ているので時間の問  
題です。」

「早く始めませんか？」

「ですよ〜。」

「ミクラス！ディノゾールをぶっ潰せー！ー！！」

リュウの指示に従ってミクラスは走り始めたが岩に躓きこける。

【バニツシュ】

ジョージさんに代わる。

「流星シュートを見せてやれ！アミーゴー！」

岩を前に置き蹴るつとすが、足を上げ過ぎて二ける。

【バニツシュ】

テツペイさんに代わる。

「泣き声で敵を威嚇している…！習慣や本能まで再現してるなんて、すごいな〜メテオール！」

観察して時間を忘れるテツペイさん。

【バニツシュ】

マリアさんに代わる。

「頼んだわよ。ミクラス。」

しかし、ミクラスはマリアさんをつまえてそのまま時間切れ。

【バニツシュ】

テントの上に落ちるマリアさん。「愁傷様。

そして、俺に代わる。

「ミクラス、ジャンプしてディノゾールを潰せ！」

ミクラスは少し怯える。

「怖がるな！お前にはその力がある！」

目をツキリつとさせるミクラス。

「いいぞ、ミクラス！のしかかれ！」

思いっきりジャンプするミクラス。

そして、そのままディノゾールを押しつぶす。

「良くやったぞ。ミクラス！」

【バニッシュ】

コノミさんに代わった。

「ミ・ク・ラ・ス！がんばって！怖くないから！」

ミクラスはまた怯えた目をせずにディノゾールに突っ込んでいた。

そして、ディノゾールに当たった！ってあれ、ここは消えるんじゃないかなかったけ？

どうやら、ここで原作ブレイクしてしまったようだ。

そして、俺達はフェニックスネストへ帰った。

〜フェニックスネスト ケルビム出現前〜

「さてと、今回は遊星っぽいデッキで行くか。」

因みに、対怪獣用にバーンカード（ファイアーボールや仕込みマシンガン）や、動きを封じるカード（六亡星の呪縛、デモンズチェーン等）を入れている。

そして、警報が鳴る。

「行くか！」

俺は走り出した。

〳〳メインルーム〳〳

「遅れました！」

『宇宙怪獣がV-77の穴を狙ってきました。レジストコードはケルビム。』

「G U Y S サリーゴー!!」

「「「「「G・I・G!!」」」」」

「お願いね。コノミちゃん。」

「∴G・I・G!」

「ジンカはセンサーフェニックス（偵察飛行機の名称）で向かってくれ！」

「G・I・G！」

こうして俺は、ケルビムが出現した町に向かった。

くく町くく

俺は、ビルの屋上に着陸した。

「とりあえず、ケルビムの攻撃からなるべく町を守るか。こい！サイバードラゴン！」

機械で出来たドラゴンが現れる。

『ジンカ君！君の近くに謎のエネルギー体が出現！注意してください！』

「大丈夫ですよ、テツペイさん！奴が見ているのはケルビムです！  
そんな会話をしていると、ケルビムが火球を吐いた。

「つつ！サイバードラゴン！」

サイバードラゴンはレポリューション・バーストを吐いて火球を相殺した。

しかし、ケルビムはリュウさん達の接近に気づき体ごと回転させ尻尾で町を壊そうとする。

「させるか！六亡星の呪縛！」

六亡星が表れ、それが怪獣の動きを止める。

しかし、10秒でそれは破かれた。

そして、ミクラスが出てくるが逃げ始める。

更に、攻撃を受けて消える。

町は守ったものの残ったのはミクラスの汚名だけだった。

くくフェニックス・ネストくく

そして、トリヤマ補佐官に文句を言われているコトミさん。

「幸い、ケルビムは日本海に潜伏中だが、敵前逃亡とは……」

「すみません！私…怖いのだめなんです……」

「補佐官！マスコミが、会見場に集まっていますよ！」

「分かっておる！」

補佐官は出ていった後、皆はコノミさんが悪いんじゃないと言っていたが、コノミさんは暗いままだった。

その後、会議の結果ミクラスでの接近戦でケルビムを制圧するしかないようだ。

くく昼くく

皆がコノミさんを励ましに行ったようだが俺は警報に備えていた。

「あれ、そのカード。あ、遊戯王かな。」

サコミズ隊長が俺の横から出てきた。

「あ、はい。すみません！」

急いで片付け始めるとサコミズ隊長が俺の手を制した。

「いいよ別に。それに彼から君の事は聞いているよ。」

あ、そういえばこの人最初からミライの事情していたっけ。

「今度、私とやるっか。」

「いいですよ。」

こうして、サコミズ隊長とデュエルの約束を交わした。

その後、ケルビムが出現した。

くく再び町くく

コノミさんはミクラスを出し、今度こそ敵に向かっているミクラス。

俺は自分側の無線を切り、センサーフェニックスの中で、

「5サイバードラゴンに 3ジャンク・シンクロンをチューニング！飛翔せよ、スターダストドラゴン！」

光差す道から、白銀色の光を放つ竜が現れる。

『綺麗…』

無線からマリアさんの声が聞こえる。

「響け！シューティングソニック！」

ケルビムに放った光線は命中し、怯んだケルビムにミクラスが突進。

しかし、ケルビムは反撃を始めてミクラスを尻尾で捕らえた為、シューティングソニックが撃てない！

その時、光の中からメビウスが現れた。

メビウスはケルビムを殴り、ミクラスを助けた。

そして、再び3体はケルビムに向かった。

ミクラスが突進して後退、メビウスが前進して殴り倒れるケルビム。

ミクラスは素早く近づき、ケルビムを抑える。

「今だ！シューティンググソニック！！」

そこに、メビウスの必殺技であるメビウムシュートとシューティンググソニックが炸裂しケルビムは倒される。

【バニッシュ】

ミクラスはうれしそうに鳴きながら消えていった。

G U Y Sメンバーからは歓声があふれていた。

その後、ミクラスは回収されたが時間が経てば帰って来るらしい。

「よかったですね。コノミさん。」

「はい！」

さてと、次はボガールか……………

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7007x/>

---

メテオールを超える力

2011年10月24日03時01分発行